

静岡県ひきこもり支援センターの居場所支援について  
～居場所版静岡式ひきこもり評定尺度の得点変化から見た利用者の変化～

精神保健福祉センター ○猪又準 庄末永佑 藤田登志美 内田勝久  
琉球大学人文社会学部 草野智洋

## 1 はじめに

静岡県は2013年に静岡県ひきこもり支援センター（以下「センター」という）を設置し、ひきこもりに悩む本人や家族の電話相談、来所相談等の支援を行っている。2016年9月からは県内4か所に居場所を開設し、2018年5月に5か所、2020年12月には6か所に増設して本人の支援を行っている。

川田ら（2018）<sup>(1)</sup>は、居場所利用開始時と、利用終了時または2018年3月末時点での、本人と親の変化を「静岡式ひきこもり評定尺度」<sup>(2)</sup>を用いて分析した。その結果、本人の居場所利用開始後、本人には、社会参加について家族と話し、具体的なアクションに移ることができた等の変化が認められ、親には、家庭内での焦りや不安が和らぎ、本人のひきこもり状態を受け入れることができた等の変化が認められたと報告している。この報告から、居場所の利用によって、家庭において本人や家族に肯定的な変化が見られることが示唆された。一方で、居場所の継続利用と居場所における本人の変化に着目した調査研究は、ほとんどない。

そこで今回は、1年以上継続して居場所を利用した者35人を対象に、居場所における本人の変化を明らかにすることを目的に、演者の1人である草野が作成した「居場所版静岡式ひきこもり評定尺度」（以下「変化の指標」という）を用いて分析、考察したので報告する。また、センターが行う居場所支援についての示唆を得たため、併せて報告する。

## 2 居場所について

ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン<sup>(3)</sup>では、ひきこもり支援における居場所とは、「中間的・過渡的な集団との再会段階」や「社会参加の試行段階」で継続的に行う支援方法のひとつであり、これらの段階の支援には、非難されることのない支持的な枠組みの確立や、スタッフ、場所、時間など集団の安定性と恒常性の保障など、十分かつデリケートな配慮が必要であると述べている。

居場所には、本人の社会参加に向けた準備段階の支援として、スタッフや本人同士の交流など、家庭以外の安定した場で他者と安心して過ごすことができる環境の提供が望まれるのである。

## 3 方法・結果

### （1）居場所の利用実績

2016年9月～2022年3月末までの居場所の利用延べ人数は2,449人、実人数は57人であった。実人数の男女割合は男性6割、女性4割、年齢別割合は、全体の5割弱が20代、3割弱が30代であった（図1）。実人数57人のうち、2022年3月末時点で利用開始から1年を経過していない者は11人、利用継続者だが中断期間があり1年後の評価ができなかった者は4人、1年経過前に就職や復学を理由に終了した者は4人、1年以内に利用を中断し再利用しなかった者は3人であった。

### （2）分析対象者35人の変化

2016年9月～2022年3月末までの居場所利用者57人のうち、1年以上継続参加している利用者35人を対象に、変化の指標を用いて、初回利用時の変化の指標の得点平均と1年後経過時の得点平均を比較した。また変化の指標のどの項目で変化が大きいかについて、初回利用時、半年経過時、1年経過時、2年経過時を比較し、分析した。変化の指標は、各居場所スタッフが全利用者を対象に、初回利用時から半年ごとの得点で評定しているものであり、項目は、10項目2件法、10点満点である（表1）。

利用者の初回利用時と利用開始1年後の変化の指標合計得点の平均値の間には、 $P < 0.001$ 水準で有意差が認められた（図2）。

利用開始半年後の行動変化では、次のステップを考え始めた（H）は4割弱、実際に次のステップに進んだ（I）は3割弱であった。変化の指標の差が20%以上増加した項目は、自分の意見を

表1 居場所版静岡式ひきこもり評定尺度 得点 /10

- A 不安や緊張のためにキャンセル・早退することなく、当初の予定通り居場所に居られる
- B 誘われれば居場所スタッフや他の利用者と一緒に遊ぶ場に加わることができる
- C 誘われれば居場所スタッフや他の利用者と一緒に雑談する場に加わることができる
- D みんなが笑っているときに自分も自然に笑うことができる (場にそぐわず一人でニヤニヤしていたりするのは、これに含まない)
- E 自分から他のメンバーに話しかけたり遊びに誘ったりすることができる
- F みんなで何かをしようという場面で、自分の意見を言ったり提案ができる
- G 自分のちょっとした失敗や恥をネタにして笑うことができる
- H 居場所の次のステップ(就労支援機関の利用、ボランティア、中間的就労、アルバイトなど)について考え始める
- I 居場所の次のステップに実際に進む(体験的、単発的な利用や相談も含む)
- J 居場所の次のステップに継続的、長期的につながっている

図1 利用者の年齢別割合(実人数)(n=57)

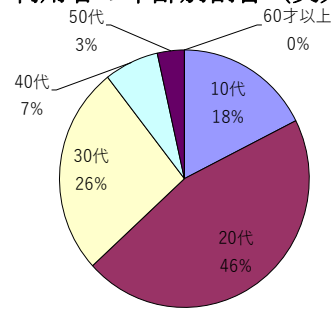
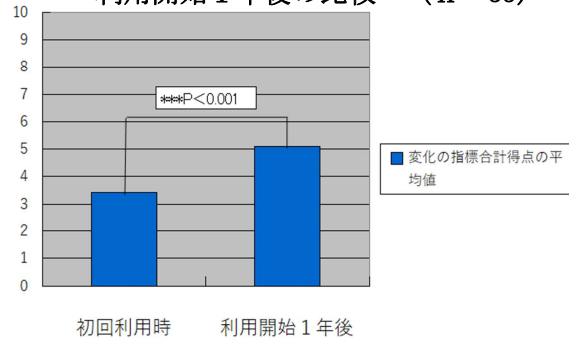


図2 居場所版変化の指標 初回利用時と利用開始1年後の比較 (n=35)



言える (F ; 26%差)、次のステップを考え始める (H ; 26%差)、次のステップに進む (I ; 20%差) であった (図3)。

2年後には、6割以上が次のステップを考え始め、約半数の利用者が次のステップにつながった。開始時との変化の指標の差が20%以上増加した項目は6項目で、多い項目から順に次のステップを考え始める (H ; 60%差)、次のステップに進む (I ; 50%差)、次のステップに継続的につながっている (J ; 40%差)、自分の意見を言える (F ; 30%差)、雑談ができる (C ; 25%差)、自然に笑える (D ; 25%差) であった (図4)。

該当者の割合が20%未満、かつ半年後に変化の指標の差が10%未満であった項目E、G、Jのうち、EとGの2年後の変化の差は10%以下であったが、Jは1年後も2年後も20%ずつ増え倍増した。また、倍増傾向は、H、Iの項目でも同様であった。

#### 4 考察

(1) 利用者の変化を支える要因について  
原田 (2020) (4)は、ひきこもり当事者について、「もともと対人緊張・集団恐怖が強い、人と付き合うことに著しい疲労感(対人疲労)を覚える、コミュニケーションがうまくでき

図3 変化の指標項目別該当者の割合 (開始時・半年後) n=35

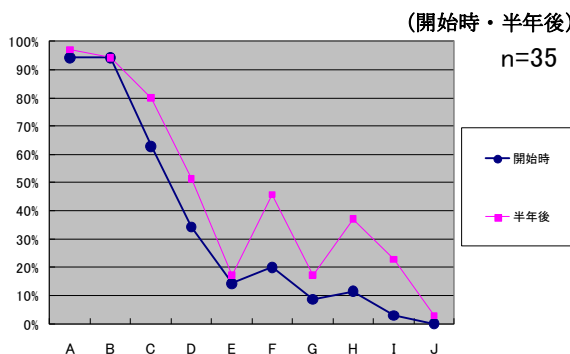
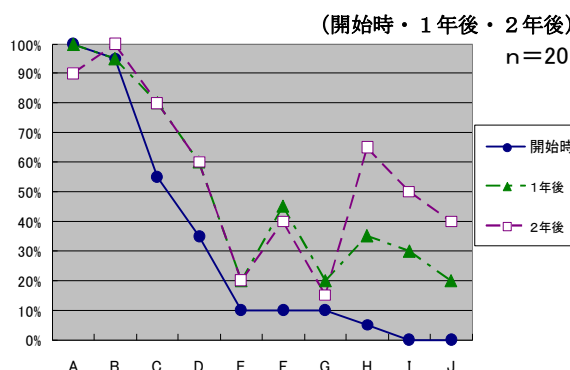


図4 変化の指標項目別該当者の割合 (開始時・1年後・2年後) n=20



ないという人が少なくない」と指摘している。

本研究で、そのような特徴を持つ利用者が多い居場所において、雑談に参加できるようになる、自然な笑顔が見られる等の対人関係を含む肯定的な変化が生じたという結果が得られたことは、居場所スタッフが原田が指摘する利用者の特徴に配慮した関わりを行い、居場所が利用者にとって安心・安全な場となっていたものと考えられる。利用者が尊重され、受け入れられる安心・安全な場であってこそ、次のステップを考え始めることができ、自身のペースを保障されながら具体的な次のステップにつながっていくという流れがあったと考える。また、居場所が集団支援の場でもあることから、他の利用者が次のステップを経験する姿を見て、励まされたり見通しを持てたりすることで、集団の力動が働き、自分の次のステップを考えていく効果を生んだことも推測される。

## (2) 居場所利用の開始時期とセンターの行う支援について

9割以上の者が、利用当初から誘われれば遊びに加わることができていた。また6割弱の者は誘われれば雑談に加わることができていた。この結果から、本研究の分析対象者の多くは、利用開始時点で、ひきこもりの回復過程において「活動期」<sup>(4)</sup>と呼ばれる状態（外出ができるようになり、家族以外の人と短時間話をしても以前のような不安や疲労をあまり感じなくなってくる時期）に該当していたものと考えられる。

つまり、まず家庭が安心・安全な場所であり本人のエネルギーが枯渇した状態から回復していたこと、さらに本人自身が居場所の利用を考える段階になってから利用開始したことが、継続参加に至る結果をもたらしたと考えられるため、センターでは、このタイミングでの利用開始を支援することが適切だと考える。一方、「充電期」<sup>(4)</sup>と呼ばれる状態（今の状況に納得できず、エネルギーが低下している状態。エネルギーを蓄えることが大切な時期であって、「活動期」以前の状態）で無理に居場所につながっても、利用継続が難しくなったり、それが傷つき体験となったりして、ひきこもりの状態像が深まるリスクがあるため、支援には十分留意する必要があると考える。

## (3) 居場所及び居場所スタッフの役割について

本研究の結果、居場所が利用者にとって安心、安全な場として機能していることが示唆された。居場所が、利用者の社会参加に向けた準備段階として機能するためには、利用者が尊重され、受け入れられる安心・安全な場であると感じられることが大切である。そのため、居場所スタッフは、居場所の“場の機能”を調整する役割を担うとともに、対人関係の肯定的な変化を促し次のステップにつながることを中長期的に見据え、利用者に伴走する役割を担うことが重要であると考えられる。

## 5 研究の限界と課題について

本研究では、各居場所スタッフのケース担当が評定した変化の指標を活用したため評価視点にばらつきがあった可能性を否定できない。評価視点を統一し信頼性を高める工夫が必要である。また、今後さらに多くの対象を分析し、居場所利用の効果等の検証を進めることが課題である。

ひきこもりの居場所支援においては、早期変化や長期在籍が良いというわけではない。今回のような量的分析に加え、個別ケースの質的变化に注目した研究を並行して行うことが望ましい。

### 引用・参考文献

- (1) 川田ら：第54回全国精神保健福祉センター研究協議会抄録集
- (2) 草野ら：静岡式ひきこもり評定尺度を用いたひきこもり支援の効果判定について  
静岡福祉大学紀要 第13号（2017年2月）p1～4
- (3) 厚生労働省：ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン（2010年5月）
- (4) 原田：支援者・家族のためのひきこもり相談支援実践ハンドブック（2020年）